

黒点

——或る青年の「回想記」の一節——

豊島与志雄

青空文庫

前から分っていた通り、父は五十歳限り砲兵工廠を解職になった。

十二月末の、もう正月にも五日という、風の強い寒い日だった。父はいつになく早く帰ってきた。

「電気はまだか、薄暗くなってるに。」

初めは怒鳴りつけるような、後は泣くような、声の調子だったが、まだどこか昼の光の残ってる中につけられた、赤っぽい電燈の光で見る父の顔に、私はなお一層びっくりした。父は弁当箱を抛り出して、火鉢の前にぼんやり坐っていた。その顔付がまるで腑脱けのようで、眼だけが気味悪く光っていた。

これはずっと後の話だが、私の友人に、初犯二年間の刑務に服してきた男がいる。私も少し掛り合いの間柄だったので出迎いにいってやった。その時刑務所の門の前で七八人の知人に取巻かれた彼の顔が、あの時火鉢の前に坐つてた父の顔と、丁度同じような印象を私に与えた。

一口に云えば、もうすっかり精根つきながら、きよとんとした眼の底から、興奮してびくびく躍つてゐる魂が覗き出してる、というような顔付だった。額や頬骨のあたりの皮膚が硬ばつてかさかさになっていた。

台所から母がやって来て、二人で何かごちやごちや話し出した。私は室の隅に縮こまっていたので、二人の話をよく聞きもしなかつた。

ったし、またはつきり覚えてもないが、八百円という言葉が何
度もくり返されてるようだった。——今になって考えると、それ
は父が退職手当に貰った金高だったらしい。父は私が生れる遙に
以前から、まだ母と一緒にならない前からずっとその時まで三十
年間砲兵工廠に勤めて、五十歳になったので、八百円で逐つ払わ
れたのだ。

三十分ばかりして、父は何処へか出て行った。私と妹と母と三
人で食事をした。

母は何かしら興奮してるようだった。しよぼしよぼした眼をい
つもより大きく見開いて、妹が御飯粒や醬おしたじ油を少しでもこぼす
と、すぐにかみかみ叱りつけた。かと思うと、その眼がまたすぐ

にじくじく水気ずいてきて、小さくどんよりとなつて、箸の手を休めて物を考えこむのだった。

何かえらい事が起るんじゃないかと、そういう気が私はした。

ところが実際は、全く思いもかけないようなことになつていった。私は妹と二人で炬燵にあたりながら、新聞の広告の大きな字などを、虫眼鏡で眺めていた。それは隣りの寺田さんから貰つたもので、鯨骨の柄のついた非常に大きなものだった。

「普通の者がいくら欲しがつたつて、なかなか手にはいらぬ立派なものなんだから、大事にしまつておけよ。これでこんな風にして空を見ると、眼に見えない星が見えてくる。太陽を見ると、表に黒い汚点があるのだから分るんだ。」

その太陽という言葉が私には嬉しかった。然し太陽を透し見ると、ただ一面にぎらぎらするだけで、どこにも黒い汚点なんか見えなかった。ただ、夜の空を眺めると素晴らしく綺麗だった。昼間でも星がよく見えた。

それを、新聞の大きな字の上にあてると、黒い線の中にいろんな形が白く浮出してきた。花や虫や変挺な模様が、次々に現われてきた。「ほら……ほら……。」と小声で囁きながら、私は妹に見せてやった。私達子供はおとなしくしていなければいけないよな気がしたのだった。

母は用が済んでも炬燵の方へやって来なかった。火鉢の前に坐って何か調べ物を初めた。

箆筒の下の方の片隅に、黒い鉄の延板がやたらに打ちつけてあって、そこに、手文庫代りの小さな抽出が幾つもついていて、母はその中から、いろんな紙片のはいってる袋や、小さな帳面や、黒い玉の小さな算盤などを取出した。そして、脂の多い皺くちなな眼をしかめて、しきりに計算を初めた。——後で分ったことだが、母は内々知人の間に、日歩の金なんかを廻していた。それごとく僅かな額で兄の慰藉料や姉の身代金などから差引いたものらしかった。さんざん借金に苦しんできたので、自分でもそんなことをしてみたくなったのだろう。

計算が少しこんぐらがってきたとみえて、母は癩癩を起し初めた。口の中でぶつぶつ云ってみたり、器具にあたりちらしたりし

ていたが、しまいとその飛沫を私達の方へ持つて来た。

「何をぐずぐずしてるんだい。寝ておしまいよ。」

「もう寝てもいいの。」と私は云った。

「寝ておしまいよ。」と母はくり返して云った。「またそんな役にも立たないものを持ち出して、何をしてるんだい。勉強もしないで……そんなもの、こつちへよこしておしまい。」

私は虫眼鏡を取上げられはすまいかと思つて、急いで立ち上つた。そして次の四畳半に蒲団を敷いて、妹と一緒に寝た。妹はすぐに眠ってしまったが、私はなかなか眠られなかつた。

九時を打つて間もなく、父が帰つてきた。母は帳面やなんかを元の通りにしまつて、抽出に鍵をかけた。父は酔つてるようだつ

た。足音が非常に大きかった。

「どうだったんだい。」と母は尋ねた。

「どうもこうも……ばかばかしい話さ。俺達のような、期限がきつて解雇された者あ、ほんの僅かきり集ってやしねえ。臨時解雇の者ばかりなんだ。ところが彼奴等あ、まだ金が下ってねえって始末だろう。そう強えことばかりも云えねえわけさ、ぐずってばかりいてつまらねえから、俺あ先に帰ってきた。」

「だからさ、ごらんな、わたしが云った通りだろう。初めから出かけていくのが間違ってるよ。でもまあ、巻き込まれなくてよかったよ。」

「うむ……。向うでもうまくやったものだ。おしつまって金を渡

す、そうすりやあすぐ正月だ。何だ彼だ云ったって、うまくいくわけのものじゃあねえ。……だが、寺田さんも黒幕の一人だから、何とかなるかも知れねえが……。」

「寺田さんもそうかい。」

「うむ。」

私はぼんやり聞いていたが、その寺田さんという言葉に、はつきり眼がさめてしまった。然し父母の話は、私の頭ではよく分らない事柄に及んでいったし、声も低くなっていった。そのうちに、父はもう少し酒を飲みたいと云い出した。

不思議なことには、その晩母は少しも逆らわなかった。平素なら、夜遅くなつて父が酒を飲み出したりすると、母は頭から小言

を浴せて、飲んだくれだの碌でなしだのと叱りつけるんだが、その晩に限って何とも云わないで、台所から一升壺まで持ち出してきた。

「酒は沢山あるから、いいだけおあがりよ。わたしも一杯やってみよう。」

焼※の匂いがしてきたので、私は寝返りをしたり、欠伸をしてみたりした。

「まだ起きてるのかい。」と母がこちらの室を覗き込んできた。

「うむー……。」「と私は生返辞をした。「何時だろう。」

「なにを生意気なこと云ってるんだい。眼がさめてるなら起きておいでよ。」

母の声は案外やさしかった。で私は飛び起きて、着物をひっかけながら、炬燵の方へもぐりこんでいった。

餉台の上には、蛸の足だの※だの海苔などが並んでいた。父はそれらのものには手もつけないで、ただ酒ばかり飲んでいた。それもいつものように濁酒ではなかった。私は※を貰ってしゃぶつた。

「啓太郎でもいてくれると、これからのわたし達も楽なんだがね。」

そんなことを母はしみじみと云い出していた。それから暫く話は啓太郎のことになっていった。私は何となく嬉しかった。父母がそんな風にしんみりと彼のことを話すのを、私は余り見たこと

がなかったのである。

私は長兄啓太郎については、非常に清らかな記憶を持っていた。彼の死骸が砲兵工廠から運ばれてきた時、私はまだ六歳にしかなくていなかったが、彼が死んだとはどうしても思えなかった。木^き香^がのぷーんとする白木の棺の中に、真白な布にくるくる巻かれて、誰が入れてくれたものか、黄色い花の中に寝ていた。その寝顔を、私は父の腋の下から覗いた。いつも落凹んだ恐い眼付だったが、その時は、金魚の出目を思わせるように、閉じた眼瞼が円くふくらんでいた。口が半ば開いていた。小鼻がぴしゃんこになっていた。その全体が、どこか道化した異常なものに見えた。で私はその瞬間、兄はえらい者になったような気がした。

その感じが、後々まで私の頭から去らなかつた。

「機械が悪かつたんで、お前の兄さんが悪かつたんじやない。それを役員達は、お前の兄さんの方を悪いことにして、たった二百円で済ましてしまったのだ。」

寺田さんはそういう風に私に話して聞かしたことがある。兄が巻き込まれた調しらべがわ革には、前から少し損所があつて、そこに兄の上衣の裾が捉えられたのを、役員達はどうしても是認しないで、兄が巻き込まれたために損所が出来たのだと主張したそうである。然し幼い私には、そんなことはどうでもいい問題だつた。ただ兄の死体の印象だけが大事だつた。そして私の頭の中には、兄が何だか異常なものに……神にでもなつたような幻想が次第にはつ

きり出来上っていったのだった。

暫くすると母は何と思つてか、押入の隅っこにある小さな仏壇に、蠟燭をともしたり線香を上げたりした。しまいには声にまで出して、南無阿弥陀仏を唱えた。

「何をしてるんだ、止めよ。」と父はふいに声を立てた。「人が酒を飲んでるところへもつてきて、抹香臭え真似をしやがつて……。」

「いいじゃないかね。わたしは仏様にお礼を云つてるんだよ。」
母は落付き払っていた。

「仏様にお礼だつて……何を云つてるんだ。」

「お前さんが無事にこれまで勤めてきたのも、仏様の御蔭だよ。」

わたしはね、毎日、お前さんが無事で戻るようにと、仏様に願っていた。そりやあね、お前さんの仕事は啓太郎のとは違っちゃいたが、いつどんな怪我をしないと限らないじゃないか。それがこうして……。」

「無事にお払い箱になったってことか。ばかな。」

そんな話を聞いてるうちに、私は呆気にとられてしまった。これまで一度も、母が仏壇を拜んでることも見たことがなかったし、父に対して母がそんなにおとなしいことも見たことがなかったのである。そしてふと気付いたのだが、母の髪が変に赤茶けてると父の髪が変に灰色がかつてるとに、何となくびっくりした。

母はまた南無阿弥陀仏を初めていた。

「止しなつたら……止せよ。」

父はひどく癩癩を起してゐるらしかった。その拍子に、銚子を一本ひっくり返してしまつた。

「それごらんな仏様の罰があたつたんだ。」

「なに、仏様の罰だつて……。あたるならあたつてみる。どこからでもあたつてみる。」

私は驚いて、台所から雑巾を持って来た。が母はそれをひつたくつて、自分で畳を拭いた。それから銚子の酒を代えたりした。

「うむ、慾張りめ、八百円がそんなに有難えか。」

父はまだむしゃくしゃしてゐるらしかった。が母はやはり落付き払つていた。

「ええ、どうせそうだろうよ。わたしはこれでもね、自分の息子を殺されて、その涙金の二百円ぼっちりの金を、お辞儀をして貰つてきやしないよ。」

「何だと、誰がお辞儀をした。さあ云つてみねえ、誰がお辞儀をした。」

然し父はもう酔つ払つて、お辞儀みたいに頭をふらふらやつていた。それをきよとんと振立てて、私をじつと眺めた。

「おや、とんちきな真面目くさつた顔をしてるじゃねえか。うむそうか、お前は豪い者になるんだつたな。何でもいいから豪い者になれよ、いつまでも、世の中に用が無くならねえようにな。俺のようになつちやあ、もう駄目だぜ。駄目つてこたあ、世の中に

用がなくなるってことだ。」

父はもう舌がよく廻らないのを、一生懸命に云い続けてるらしかった。

「俺はな、十二の時から世の中に乗り出したものだけ。十二の時から……鉄屑を拾ってな、大した仕事じゃねえさ。だが、素晴らしく大きな釜だったぜ。十石も二十石もはいるうというやつでね。その中に鉄が真赤に煮えくり返ってるんだ。そんな釜を持つてる者あ、ど豪い人だろうと、俺は子供の時分そう思ったね。そして俺はどうかと云やあ、工場の隅から隅まで鉄屑を拾って歩く役目さ。立派な職工達が夜中まで働えてた。造兵なんかよりもつとさ。ちつと整ってた。今から見りやあ、ちつぽけな工場だが……。そ

の工場で俺は、鉄屑を拾ってきたんだ。そして……なあに考えてみりゃあ、一生鉄屑を拾ったようなもんだ。他人のためにな……。だが、こいつが肝心だぜ。こいつ一つだ。鉄屑でも拾ってるうちやあ、まだ世の中に用があつたんだ。鉄屑も拾えなくなっちゃあ、もうおしまいだからな。だが、今時の若え者あ、豪いことを考えてるぜ。そいつが俺にはよく分らねえんだが……。何しろ、もう年が年だからね。啓太郎でもいりゃあ、俺も気が強えんだが、俺一人じゃあ、気が弱くなるのも無理はねえさ。一番大事なこたあ、年が若くつて、……豪い者になることだ。」

父はもう私に話しかけてるのでもなかつた。杯の酒を見い見い、時々それをぐつとあおつては、ぐずぐず饒舌り続けていた。母は

そんなことには頓着なく、小皿の物をつまんだり、自分でもお酒を飲んだりしていた。

おかしな状態だった。がなおおかしなことには、父はいつのまにか仏壇の方へにじり寄って、新らしい位牌と睨めっこをしていた。

「いつまでつけっ放しにしてるんだ。火事でも起したらどうする
。」

父はさも忌々しそうにそう云って、よろよろ立ち上りながら、燃えつきようとしてる蠟燭の火を吹き消したが、その後にもまた新しい蠟燭をともした。

「明るくなつたらう、ははは。」

そこに屈みこんで、銚子と杯とを両手に取って、仏壇と差向いに酒を飲み初めた。そしていつしか、南無阿弥陀仏を口の中で唱えだして、身体をふらふら揺っていたが、そのまま横のめりに寝入ってしまった。

「仕様がなないね。」

母は独語ちながら、父の上に蒲団をかけてやった。

父のところへは、時々仲間の職工達が一人二人ずつやって来て、十分か二十分くらいしては帰っていった。そういう人達に父は余り取り合わないらしかった。母が応対してることさえあった。何の話だか私には分らなかつたが、後になって考えてみると、一部

の職工達の間は何等かの計画がめぐらされてたものらしい。

父は毎日、朝から酒を飲んでた。酒は台所の縁の下にしまつてある濁酒だった。時には一杯つまつた一升壇が三四本も並んでることがあつた。その上奥の方には、大きな甕が据えてあつた。

「あの甕のことを人に云つちやいけないよ。人に聞かれたら、酒はよそから買つてくるんだと云うんだよ。いいかい、忘れると承知しないよ。」

母は私にそう云つて聞かしていた。そしてよく知つてる私にまで甕を見せまいとしていた。その理由が私にはどうしても分らなかつた。なぜ自分で酒を拵えてはいけないんだらう。酒を拵えるとなぜ罰金を取られたり監獄に入れられたりするんだらう……。

私は或る時そのことを寺田さんに尋ねてみた。すると寺田さんはこう答えた。

「そうだ、お前の云うことが本当だ。だが、そんなことを人に云つちやいけない。……今に分るよ。」

私はばかばかしい気がした。人に聞かれたらいつでも云つてやるつもりでいた。——幸なことには、一度も人に聞かれたことがなかった。

父は朝から酒を飲むばかりでなく、酒の肴に目差や※などをしやぶっていた。それまではいつも味噌汁と漬物ばかりだったのである。そして晩の惣菜もずっとよくなっていた。職に離れた父だけがそうなので、私には不思議に思えた。姉までが時々、カフェ

ーから何やかや父に持って来ることがあった。

然し父は皆から食物の上で大事にされながら、他の事では殆んど相手にされなくなっていた。正月の買物のことだの、炭を買入れることだの、竈の下を瓦斯にするか薪にするかということだの、姉がカフェーを住み換えるかどうかということだの、秋から持ちこされていた家賃値上の問題だの、凡てが母と姉との間で相談され解決されてるようだった。

或る時、植物園の前ところに、駄菓子屋が一軒売物に出ていた。母と姉とは二日も三日もそれについて話をし合つて、わざわざ店を見にまでいった。

「そりやあいいぜ。」と父は云つた。「そうなりやあ、俺が車を

引つ張つて売りに歩いてもいい。」

「まだきめてやしないんだよ。」

母はそう答えたきりで、姉の方へ話を向けてしまった。

「だが、俺もこうぶらぶらしていたんじやあやりきれねえからな。」

そして父は、時々出歩いては職を探し廻っていた。そのことについてだけは、母も真面目に相談にのつて、あれこれと就職口を頼みこむ方便を考えてやった。然しいつまでも父の職は見付からなかつた。初め砲兵工廠を止すとすぐに王子分廠の方へ出る手筈だつたらしいが、それももう駄目ときまつていた。

「お前さんがどじだからよ。」と母は腹を立てたような蔑んだよ

うな口の利き方をした。「だけど、長年苦勞をしてきたんだから、暫く遊んでおいでよ。わたし達はお前さんを当にはしていないんだからね。」

「そりゃあ、どうせ俺はもう、世の中に用のねえ人間なんだが……。」

世の中に用のないということは、殆んど父の口癖となっていた。そしてそれはまた、父が口を噤む最後の捨台辞でもあった。その極り文句を吐き出してしまふと、いつもむつつり黙り込んでしまった。そしてひどく陰鬱な顔付になった。それが、髯を剃ってる時には痛々しく見え、髯が伸びてる時には兇悪に見えた。

髯が剃られてるのと伸びてるので、人の顔の感じが甚しく異

るのを、私は最初に父に於て見てきた。髯のない父の顔は如何にも善良そうで、世の中の苦勞を嘗めつくしてきて弱りはててる、云わば温良な落伍者の感じだった。けれど、不精髯がもじやもじや生えてる父の顔は、何だか世の中に始終不平を懐いていて、何かのきっかけがあれば、どんな悪事をも平気でやってのけそうな感じだった。

母もそれに気付いてると見えて、父が就職口を探しに出歩く時なんか、やかましく云って髯を剃らせた。が平素、父は髯を剃ることをひどく億劫がっていた。

或る時、父は一包みの古釘をどこからか持って帰った。そして火鉢の横に、厚い鉄板と金槌とを持出して、曲りくねった古釘を

丁寧に伸ばし初めた。

「そんなことをして、何にするんだい。」

母は頭ごなしにやつつけていたが、父はただにやにや笑ってばかりいた。

その翌々日の夕方、山本屋の小僧に住み込んでる中の兄の啓次が、自転車で慌しくやつて来た。真赤になつて怒っていた。父が店にやつて来て、古釘を貰つていった、自分は恥かしくて顔が上げられなかった、あんなことをして貰つては、朋輩に顔向も出来ない……とそう云うのだった。そして云うだけのことをほんほん云つて、そのままぷいと帰つていった。

母はびつくりしたような顔付をしていた。兄が帰つてしまうと、

暫くたつてから、じりじり父の方へつめ寄つた。

「お前さんにも呆れて物が云えやしない。何てことをするんだい。お前さんがそんな了見だから、お花だつて啓次だつて、家に寄りつきやしないんだ。自分の子供の顔に泥を塗るようなことを、よくものめのめ云つて行けたものだね。そんなことをするよりは、立ん坊でもした方が、どれほど立派だか知れやしない。お前さんは乞食根性だ。」

それでも、何と云われても、父は弁解をしなかつた。

「ほう、そんなにいけねえことかなあ。」

そして陰鬱に顔を渋めてるきりだつた。

それでも、十日ばかりたつと、父は晴れやかな顔をして、また

古釘の包みを持って帰って来た。

「さすがはおおだな大店の旦那だ、お前達とは了見が違うぜ。俺が行つて話をすると、そいつあ啓次の方がいけねえつて、さんざん小言をくつてた。そして、見ねえ、この通り向うから頼んで、古釘を持たしてくれた。どんな物だつて、世の中に廃り物はねえんだ。その心得が肝心なんだ。山本屋じゃあ、これから俺の手におえねえほど古釘を取っておくつてよ。荷物の出入がはげしいから、古釘はいくらも出る、新らしい釘はいくらも要る、そこで俺の仕事が役立つつてわけだ。金なんか貰わねえ。俺はただ働えてやるんだ。」

父はすっかり喜んでいた。金槌の音が煩いと母から云われると、

寒い中を裏口に出てカンカンやっていた。

そういう父の生活は、ひどく退屈なものだったに違いない。そこから不幸が起つてきたのだ。——然し私は余り先まで筆を運びすぎた。元に戻つて事件を述べてゆこう。

父が砲兵工廠を罷めてから間もなく、私達を最も驚かしたことは、寺田さんの失踪だった。

寺田さんは父と同じ砲兵工廠の職工で、レンズ磨きの方に働いていた。四十年配の、背の高い痩せた独身者で、いつも蒼白い顔をしていた。頤にしよんぼり短い髯を生やしてるのと、右の手が左の手より長いように思われる恰好とで、特殊な印象を与えるの

だった。

彼は一年余り前、砲兵工廠へはいると同時に、隣家の離室へ越してきた。その離室が、隣家というよりも寧ろ私の家と隣家との界にあつて、大きな窓が私の家のすぐ裏口に面していたので、間もなく非常に懇意になつた。離室から一寸木戸を押し開けると、私の家の裏口に出られた。彼は度々てつて来て、夜遅くまで話しかんでゆくことがあつた。と云つても至極無口の性質で、自分の経歴などは少しも話したがらなかつた。他人の経歴も余り聞きたがらなかつた。そして多くは私を相手に、面白い歴史の話や地理の話をして聞かした。私はまだ学校で歴史も地理も教わつていなかったもので、彼を学校の先生よりも豪いと思つた。そして殊に、

彼が日本中のどこでもよく知ってるのに喫驚した。彼はまた、星のことをも話して聞かした。それから習字も直してくれた。

「わたしは字は下手なんだが、お前よりは上手なつもりだよ。何事でも、自分より少しでも上手な人には教わつとくと、いつか為めになるものだ。どれ、わたしが直してやろう。」

学校の清書を見せると彼はそう云つて、二重まるのついてる字でも何でも構わずに、どしどし直していった。——彼の字は何だかひどくまるっこい感じのするものだったことを、私は未だに覚えてる。

父が砲兵工廠を止す前後、彼はひどく忙しそうで、毎晩出歩いていたらしい。私は彼の姿がちつとも見えないので、よく裏口か

らその室の方を覗いて見た。けれど窓に光のさしてゐることは一度もなかつた。

彼が職工の運動に關係してゐることは、父の話でほぼ分つた。ただそれがどんなことかは、当時の私には全く分らなかつた。

ところが、大晦日の前日の夜、彼は久しぶりで私の家にやつて来た。私は嬉しかつた。職工の運動云々のことにも拘らず、父母も喜んで彼を迎えた。そして彼は父と酒を飲み初めた。

その晩彼がどんなことを云つたか、私は殆んど覚えていない。思い出すことといつてはただ、酒を飲むに随つて、彼の額が益々蒼白く澄んでゆくような感じだつたのと、帰りしなに、母へ眼病の妙薬とかいう薬草を置いていったのと、虫眼鏡で私と暫く遊ん

でくれたのだけである。——薬草というのは、四五寸ばかりの小さな乾草で、その汁を水にしみ出さして眼につけると、どんな眼病にも利くというのだった。が、母は其後一度もそれを使わなかった。薬草はどこかの隅に永久に置き忘れてしまったらしい。

彼は二三時間私の家で過ごして、いつもの通り裏口から静かに帰っていった。然し彼はその晩、私が殆んど何にも覚えていないように、特別に変ったことは何一つ為しも云いもしなかったに違いない。もし、何か特別なことがあったら、私が見落す筈はなかった。なぜなら、私と彼と虫眼鏡でいろんな物を眺めながら、凡そ印刷物のうちでも、紙幣が一番よく印刷してあるというようなことを、彼から聞かされてるうちに、ふと、これきり彼はどこか

へ行つてしまふんじゃないかという気がしたのである。

世の中には、何か特別なことをしなくても或るはつきりした印象を残すような、そういう人がいる。彼も恐らくその一人だつたらう。何にもはつきりしたことを云いも為しもしないで、ごく些細な動作や身振や言葉遣いなど全体の感じで、それと人に納得させるのである。何か一つの事柄についてばかりではない。彼に対する私達一家の尊敬がやはりそうだった。父の仲間のうちでただ彼だけに対して、さんをつけて寺田さんと私達が呼ぶようになったのも、彼が何か優れた能力を見せたからでもなく、比較的知識が広いからでもなく、普通の労働者と少し違った言葉遣いをするからでもなく、自然と人柄の感じから理由なしにそうだったので

ある。職工達の間には彼が声望を持っていたとすれば、それもやはり理由なしに自然とそうなったのだろう。

彼が帰っていつてから、暫く空虚な沈黙が続いた。私は堪まらなくなつて云つた。

「寺田さんは、どつかへ行つてしまふんじゃないかい。」

母はぎくりとしたように顔を上げた。

「ほんとにそうかも知れないねえ。だがまさか……。」

「なあに行くもんか。寺田さんは解雇されやしねえ。」

父は一人で反対して、残りの酒をまだ飲んでいた。

が実際、寺田さんはその夜限り行方をくらましてしまったのである。

翌日、寺田さんの室が、戸が閉ったままになつてゐるので、私は一人気を揉んでいた。すると晩になつて、隣家のお上さんが慌ててやつて来た。手に葉書を一枚持つていた。

母は顔色を変えて父のところへ飛んできた。隣家のお上さんも上つてきた。葉書は寺田さんからのものだった。——此度都合で旅行することになった、もう帰つて来ないから、室は自由にしたい、残してゐる蒲団や書物を、少いけれど今月分の宿料の代りに処分して欲しい……とただそれだけの文面だったらしい。

「ふだん御懇意だったようですから、御心当りはありませんかと思つて……。」

お上さんはさも当惑そうな顔をして、遠慮しいしいそんな風に

云い出していた。そして、残ってるのは薄い蒲団と五六冊の書物とだけで、とても宿料なんかに追いつきはしないことを、遠廻しに云ってから、信玄袋が一つあったのだが、いつのまに持ち出したのかしらと父母の顔を探るように見比べていた。

それが母の癩に障ったらしかった。母は箆笥の隅の抽出から、一枚の紙を取出して見せた。

「わたしの方もこの通りですよ。」

寺田さんの五十円の借金証書だった。

父は二人の女の話聞きながら、堪え難いような顔付をしていた。眉根に深い縦の皺を刻んで、顔の皮膚をくしゃくしゃにして、畳の上を見つめていた。その時くらい私は父に同情したことはな

い。全く穴でもあればはいりたいたいような様子だった。ところが、ふいに調子が一変した。

「やかましい、いいじやねえか。出来てしまったこたあ仕方がねえ。」

女二人は突然の叫び声に飛び上るような身振りをした。

「寺田さんはそんなことをする男じやねえ。」

母は坐り直した。

「おや、そんなことをする男じやないんだって……それじやあ、これはどうしたんだよ、どうしたっていうんだよ。」

そして証文と葉書とを父の前へつきつけていた。

「いつまでもそのままにしとく男じやねえってことさ。」

「へえー、時さえ来りやあ、二倍にも三倍にもして返してくれるというんだろう。ばかばかしい。」

父と母との見幕に驚いて、隣家のお上さんはそこそこにして帰っていった。——だが、全く厄介な目にあつたのは彼女である。彼女の方では訴えも何もしなかつたのに、後で警察の方からわざわざやって来て、寺田さんの書物はそっくり押収してゆき、布団は当分保管を命じていたのである。

寺田さんの逃亡は、私達に大きな打撃を与えた。

父はひどく落胆しきつて、益々一人で憂鬱そうに考え込むようになった。父が寺田さんに何を期待していたかは私には分らないが、今になっての私の想像を許さるるならば、寺田さんがもし労

働運動に成功していたら、父は容易く王子分廠に就職出来たかも知れないように思われる。或はさほど深い関係がなかったにもせよ、寺田さんが逃亡したということは父の気持の上では杖を失ったようなものだったろう。

「寺田さんは屹度いつかこつそりやって来る。」

父は後々までそう云い続けていたし、そう信じきってるらしかった。

母は寺田さんを許していいか憎んでいいか、自分でも分らないような風だった。何かにつけては五十円の証文のことをもち出して、口汚く罵りながらも、すぐその後で、いい人だったとか恐い人だったとか云って、溜息をついていた。

私は何だか、誰に向つてももなく無性に腹が立った。寺田さんが母や隣りのお上さんに金銭上の迷惑をかけていったことが、寺田さんの方の不正ではなくて、或る大きな漠然とした……云わば社会の不正であるように思われた。それに私は、寺田さんが置いていったという書物がほしくてたまらなかつたのだが、それをみな警察に持って行かれたと聞いた時、憤慨の気持は一層高まつた。私は不安の余り虫眼鏡を戸棚の隅に隠しながら、寺田さんの蒼白い顔を思い慕った。

寺田さんは幼い私の性情に最も感化を及ぼした人の一人だった。思い出はいくらもある。そしてこの「回想記」の主題と密接な関係があるのは、後年横浜で出逢ってから以後のことである。その

時彼は、共産主義とトルストイ流の労働主義とをこね合した思想の把持者だった。がそれらのことは後に述べるとして、茲にはただ一つ、私が自分でも知らずに彼を喜ばした挿話をつけ加えておこう。

同じ年の秋の末だった。或る爽かな晩、私は寺田さんと二人で外を歩いていた。どうして二人で出歩いたかは今覚えていない。

両側の軒並に切り取られた長い空に、星が実に綺麗に輝いていた。薄暗い裏通りだったので、その星空が河を逆さに覗き込むようにで殊に美しかった。

寺田さんは空を仰ぎながら、立ち止ったり歩き出したりして、私に星の名を教えていた。天の川を中心にあちらこちらへ飛んで

いくので、私にはどれがそれだかよく分らなかつた。そんな星の名前なんかより、それを指し示してる寺田さんの右手の、不恰好に長いような感じのする方へ、私の注意は向きがちだつた。それは変に悪魔的な手だつた。今にもぬーつと伸び出して天まで届きそうに思えた。

「昔は、ああいう星が動いていて、東から西へぐるぐる廻つてるものだと思われていたんだよ。ところがだんだん調べてみると、動いてるのはこのわたし達の地球で、星の方はじつとしてることが分つてきた。何万年も何億年も、あの限りなく広い空の真中にいつまでもじつと一つ処に浮いているんだよ。或は動いてるのかも知れないが、まだそこまではよく分らないから、今のところ動

かないものとしてあるんだ。」

星を指してる寺田さんの手と、永久に大空の一つところに浮いてるといふ星とに、私はすっかり気圧されてしまつて、むりに反抗してみたくなつた。

「だって……だって……星は動くよ。」と私は呟いた。「僕が歩き出すと、星がついて来るんだ。」

そして私はとつとつと歩いてやつた。一寸間があつた。と突然あはははと高く笑う声が聞えた。そしてすぐに、固い感じのする手で肩をしつかと捉えられた。私は冷りとした。

「あははは。」と寺田さんはまだ笑つていた。「お前は面白いことを云うね……。なるほど、星は動く……。わたし達についてくる

……。」

もし他に通行人がなかったら、寺田さんは私の両肩を抱きしめたかも知れない。

私は寺田さんを怒らしたように思っていたので、その如何にも愉快でたまらなそうな晴々とした顔を見て、きよとんとしてしまった。寺田さんは私の肩になお右手を置いたまま、左の短い感じの手で頤のしよぼ鬚をしごきながら、眼をくるくるさしていた。

「星がついてくるか……うむ……。」

その言葉が何でそれほど寺田さんを感じさせたのか、私には分らなかった。——今でもまだよく分らない。

ただ、実に綺麗な星空だった。

大晦日の晩寺田さんの逃亡が分つたので、それからすぐに引続いた正月は、私達にとつていつもほど晴れやかなものではなかつた。その上父までが職を離れたばかりのところだつた。

「俺はもう世の中に用のねえ身体だから、この正月は家にすつこんで暮そう。」

「何を云つてるんだい、縁起でもない。……松が過ぎたら、元氣を出して仕事でも探しに出歩いてくるがいいよ。」

父と母とがそんな風な対応をしてるのを見ると、私は頼り無いような氣持になつた。それでも、食べ物の方はいつもより御馳走があるようだつた。

そのうちに私達は、或る形態えたいの知れない圧迫を外部から感ずるようになった。

隣家へ警察の者がやって来て来て寺田さんの書物を押収していったのは、十日過ぎのことだった。それから間もなく、私の家へも刑事がやって来て、寺田さんのことを——私達と懇意になった初めの頃からのことや寺田さんの平素のことなどをこまかく聞き訊した上に、もし寺田さんが姿を見せたらすぐに届出るようにと云い置いていったそうである。

「お前は何を誰から聞かれようと、知らない知らないと、それで頑張り通すんだぜ。」と父は私に云った。

「そうだ、うっかり何か饒舌っちゃいけないよ。」と母も云った。

それから母は、台所の縁の下の酒甕のことをしきりに気にしだした。そんなことじゃないと父が云つても、母は始終その方へ気を取られるらしく、姉とくどくど相談してることもあつた。それでも酒甕はやはり元のままで、沸々と新らしい濁酒を醸し出していた。

大人つて馬鹿なものだな、何をびくびくしてるんだろう、とそんな風に私は考えていた。

或る日私が学校から帰つてくると、途中で、汚い身装なりをした労働者風な男が、にこにこ愛相笑いをして近づいて来た。

「あなたは西村さんの坊ちゃんじゃありませんか。」

私は喫驚して立止つた。そんな丁寧な口を利かれたことは滅多

になかったのである。

「西村さんの坊ちゃんでしょう。」

「そうだよ。」と私は多少得意になって答えた。

「そんなら、あの……寺田さんをよく知っていらした……。」

男は腰を低く屈めながら私の顔を覗きこんできた。

「そうだよ。」と私は答えた。

「では、寺田さんの居いどころ所を教えてくださいませんか。わたしはもと、寺田さんと一緒に、子分同様に働いてた者ですが、急に用が出来て、寺田さんを尋ね廻ってるんです。何処へ行っても分らないから、あなたのことを思い出して……ええ、寺田さんから聞いていたんですよ……あなたなら御存じだろうと思って、家の方へ尋ね

ていくと、学校からまだ帰らないというんで、学校へ行つてみよ
うと思つてたところです。……ねえ、坊ちゃん、寺田さんは今、
何処にいるんです。」

「僕は知らないよ。」

私は相手の様子を見調べた。初めから何だか変な奴だなという
気がした。かねて聞いてたところでは、職工とそうでない者とは、
手を見れば、殊に手の節を見れば、一番よく見分けがつくそうだ
つた。が生憎その時男は古い外套のポケットに両手をつつ込んで、
両肩をねじり加減に前方へつき出していた。その恰好は如何にも
見すばらしい職工風だった。然し、妙に鋭い眼付と耳の前の黒子^{ほくろ}
とが何だか変だった。職工にだって耳に黒子のある者はいくらも

ある筈だが、その男の黒子はどうも職工らしい感じではなかった。

「じゃあほんとに知らないんですか。」

男は私の眼をじっと見つめてきた。

「本当に知らないよ。」

「そいつあ、弱ったなあー。」

男は何と思つたか、五十銭銀貨を一つ取出して、強いて私に握らした。

「わたしが寺田さんを探し廻つてゐることは、誰にも……家の人も、内証にしといて下さいよ。警察にでも知れると一寸厄介ですから。……では、坊ちゃんは本当に知らないんですね。」

「ああ知らないよ。」

「弱ったな。」

男はなお暫くもじもじしていたが、溜息をつきながら立去つていった。

私は家に飛んで帰った。

暫く考えた上で、私は父に尋ねてみた。

「お父ちゃんは、寺田さんがどこへ行つたか、本当に知らないのかい。」

「知らねえよ。何だい。」

で私は、途中で逢つた男のことを話した。

父はひどく淋しそうな顔付をして、考えこんでしまった。

「知らないと言うのが一番だよ。」と母は云つた。「實際何にも

知らないんだからね。」

父も母も五十銭玉を私から取上げようとはしなかった。不思議にその時は、金のことなんかどうでもいいというような調子だった。私はすっかり安心した。五十銭玉を大事にしまいこみながら、もつとあんな男が出て来ないかなあなどと考えた。

これは後年寺田さんから直接聞いた話だが、寺田さんは砲兵工廠にはいる前、九州の或る硝子工場で可なり過激な労働運動を起しかけたことがあったそうである。そのことが警察の方へ知れたので、こんどの事件もあつて、先に逃げてしまったのだとか。然し他にもまだ何かあつたらしい。

私達はそんなことを少しも知らなかった。殊に私はまだ小さな

子供だった。

幸なことには、警察の方ではもうそれ以上私達に目をつけないで、ただそれとなく網を張ってるくらいしかつた。然しそのことが、変な風にこんがらかっていった。

一月の末から、寺田さんがいた隣家の離室には、姉のお新と同じカフェーに出てる若い女が、姉の紹介でだろうが越してきた。

肉付のいい中柄な女で、顔立も姉なんかよりずっと整っていた。そして、額から眼から口元の様子が、真面目な時には一寸西洋人風に見え、笑う時にはあどけなく見えた。カフェーで混血児あいのこと綽名されてるそうだった。

私は初め彼女に余り馴染めなかった。その上、彼女は姉と一緒に

に、午前中に出かけて夜十二時過ぎでなければ帰って来なかったし、私は朝早くから学校へ出て行くので、顔を合せることも少なかった。

その女が越してきてから、暫くたつうちに、父は俄に戸締りを嚴重にしだした。隣家との間の木戸に輪掛金をつけたり、裏口の古戸に新らしい板片を打付けたり、表も早くから閉めてしまった。

「大丈夫だったら。……まさかそんなことじゃあるまいよ。」
そう母が云ってるのを私は聞いた。父は首を振っていた。

「そうじゃないかも知れねえ。だが、俺は家の中をじろじろ見られるのが嫌えなんだ。見られたっていけねえことがあるわけじゃねえが、どうも、薄気味悪くって……。それに、縁の下の……あ

れだつて、いつばれるか知れねえ。奴等の眼が早えからな。」

「ばれるならもうとうにばれる筈じゃないか、お新の友達ついでうからね。往きも帰りも一緒なんだろう。」

「だがどうも、合点がいかねえよ。」

それが何のことだか私には分らなかつたが、ただその時の感じで、父の方が道理らしい気がした。

然し実は、父の方の間違いだと分つてきた。

或る晩遅く、私はふと眼を覚した。隣りの室に、父も母も寝間着の上に着物をはおつて坐つていた。その前に、カフエーから帰つてきたままの姿で、姉がいきり立つていた。

「家の近くにいちやいけないうなら、あたしからお清せいちゃん

にはそう云うよ。ばかばかしい。人の情いろおとこ人を探偵と間違える者がどこにあるものかね。だからお父つあんは耄碌したつて云われるんだよ。」

「だが、こないだなんか、朝つぱらからやつて来て、家の中をじろじろ覗き込んでいったぜ。」

「そりゃあ、隣りだし、あたしの家だつてことが分つてるからだよ。これであたしがちゃんとしてるからいいが、もし色つ気でも出して、男につけ廻されるようなことになったら、お父つあんは死んじまうだろうよ。ほんとにばかばかしくつて、呆れ返つちまうわ。」

「いや俺も、寺田さんの一件やなんかがなかつたら、こんなに気

を揉みやあしねえが、あれ以来何だが気が弱っていけねえ。それにしたつて、今晚はちとひどすぎるじゃねえか。塀を乗りこしたりしてさ……。」

「そりやあもう夢中なんだから、それくらいのことはするだろうよ。」

「お前さんだつて、」と母が口を入れた、「若い時のことを考えてごらん。女を追い廻したことだつてあるだろう。」

「ふーむ、あんなに執念深えもんかな。」

「ええ、あの人は特別なんだつてさ。それをまた、お清ちゃんが好きで嫌で、振りぬいてるもんだから、なお逆せ上つちまうんだよ。」

「ほう、いい男なのか。」

「いやな奴さ。」

それから話は、お清とその男とのことになっていった。その時聞きかじったことや後で分ったことなどを概括すれば、お清はもと静岡で女工をしていた。するうちに、その年若い事務員と愛し合つて、何かごたごたがあつて、二人で東京へ出奔してきた。

男は或る保険会社の外交員になつたところが、生活難や虚栄心や其他いろんなことからだろうが、半年ばかりのうちに、お清は男を捨ててカフエーにはいった。そして間もなくふしだらに身を持ちくずした。その頃から、前の男が執念深くつき纏つてきた。それをお清は逃げ廻つていた。——その男というのが、父が問題にし

た男である。

私は眼が覚めたのを床の中にじつと我慢していたので、ひどく窮屈で息苦しかったし、また隣室の話が低くなったので、ごく大體のことしか聞き取れなかったが、父はむやみとこまかくこまかくつつ込んで尋ねているらしかった。それがしまいには、わきから聞いていると不思議なほど執拗くなつていった。お清と男との間柄ばかりでなく、お清の周囲のことから日常の振舞まで、根掘り葉掘り問い訊していた。私には誰の顔も見えなかったが、その時の父の眼付は、いつぞや学校の帰りに出逢つたあの男の眼付と同じようだろうと、そんな風に思われるのだつた。

姉はどうとう腹を立てたらしかった。

「どうするの、そんなことまで聞いて。あたしはお清ちゃんの人じゃないよ。」

暫く話声が途切れると、父は云い訳でもするように口籠っていた。

「なあに……よく聞いておかなくっちゃあ、安心がならねえからな。……すると、じゃあ何だね……。」

そしてまた父は訊問を続けていった。

「知らないよ、もう……。お清ちゃんにじかに聞くがいいわ。」
姉は本当に怒りだしたようだった。父もそれきり口を噤んだ。

その時になって気付いたことなんだが、父と姉とがお清のことを話してる間、母は殆んど一言も口を利かなかった。それも私に

変な感じを与えた。そして、父の執拗な問いと母の沈黙とが、冬の夜更のひっそりした寒さの中で、私の幼い頭に絡みついてきた。私は頭から布団を被った。長く眠れなかったような気がする。父母と姉とはまだ起きていた。間を置いては何だかもそもそ話をしていた。

私は父の方のことは殆んど気付かなかった。そして新たな興味でお清に近づいていった。姉の話を聞いてから、お清が何だか晴れやかな華々しいものに思われた。それは自分達のじめじめした生活とは全く別な世界のようなだった。

前に述べた通り、私は彼女と顔を合せる機会はごく少かったが、

それでも日曜日にはいつでも逢えた。彼女は姉と連立ってカフェーに往復していたので、朝はよく姉を誘いに来た。それからまた彼女は屢々カフェーを休んでいた。そんな時は大抵午^{ひる}近くまで寝ていて、何処かへ出かけてゆくこともあり、室の中でぼんやりしてることもあった。

私は不器用だった。いきなりぞんざいに近寄っていったり、遠くからこわごわ眺めたりした。それを彼女は殆んど気にも留めないらしかった。

その代り、妹のお三代は彼女によく馴染んでいた。彼女の方でも千代紙なんかを買ってきてくれることがあった。そしていつも「みいちゃん」と呼んでいた。そのやさしい呼名がお三代をひど

く喜ばせたらしい。

或る朝彼女は裏口にやって来て呼んだ。

「みいちゃん……みいちゃん……。」

お三代が立っていくと同時に、私も立っていった。彼女は朝日の光の中にぱつとした身装で、紙風船をふくらましてほんぽんやっていた。嘗て見たこともない大きな美しい五色のものだった。

「これをあげましょう。」

私は羨ましくなった。

「僕にもおくれよう。」

彼女は私の顔をしげしげ見守っていたが、突然笑い出した。

「ほほほほ……あんたも玩具おもちゃがいるの。」

私は喫驚した。何て笑い方だったろう。すっかり面喰ってしまった。

「いるならこんど買ってきてあげるわ。でも……突けて。」
「突けるとも。」

私は妹を押しのかけて、紙風船をついた。ぽーんぽーんという素敵な音だった。

それから姉が仕度を済して出て来るまで、私は妹や彼女と風船玉について遊んだ。夢中になって汗をぐっしよりかいた。

「何をしてるんだよ、男のくせに。」と姉は私を叱った。

「いいじゃないの。……啓ちゃんも紙風船がほしいんだってよ。」

私は恥しくなった。それから腹が立った。仕返しをしてやれと

いう気になった。

そして、それが却って役立った。

三四日後、午後のこと、裏口に出て、彼女の離室の方を見ると、窓の障子が少し開いていて、中で何かちらちら動いていた。それがやがて、彼女だということが分った。

私は一寸考えてから、小石を三つ四つ拾った。初めのはいい加減のところへ投げやって、最後の一つを、狙いをつけて窓の障子に投げた。古い紙だったとみえて、ぷすつというような音がした。

「あら。」

頓狂な声がして、障子が開いた。小さな壇を片手に持ったままお清が上半身を見せた。彼女は方々を透し見て、それから最後に

私の方を見た。

「あんた、今石を投げたのは。」

私は彼女が怒り出すだろうと待ち構えていたが、少しもそんな様子がないので、昂然と云ってやった。

「そうだよ。」

「いやね、障子に放ほうつたりしちや。壁にでも……屋根にでも……投るものよ。いいからいらっしやい。」

彼女がほんのちよつちよつと指先で手招きしたので、私は何のことだか分らなかつたが、やはり顔をふくらましたまま近づいていった。

「なあに。」

彼女の方からそう尋ねかけて、私の顔をじつと見入ってきたので、私はなおまごついてしまった。

「どうしたの。」

そこで私は咄嗟に思いついて云ってやった。

「風船玉……。」

「あ、あれ。忘れちゃった。こんど買ってきてあげるわ。……でも、あんた誰から石を投ることを教わったの。」

「教わらなくなたって、石くらい放れるよ。」

「え。」

「放ってみせようか。あの木だつて越せるよ。」

「そう……。」

曖昧な返辞をしておいて、それからふいに彼女はあはははと笑い出した。こないだのとはまるで違った、男のような笑い方だった。

「あっちから廻っついていらっしやいよ。誰もいないわ。」
私が一足も動かないうちに、障子はもう閉っていた。

私は木戸を押し開けて、縁側の方に廻った。

「何をぐずぐずしてるの。」

私は思いきって上っていった。

彼女は顔の化粧を直してるところだった。後ろ向きになって、私の方を鏡の中に映してみながら、猫のような手付で気忙しく顔をこすっていた。その目まぐるしいほどの手の運動と、鏡の端に

映った自分の顔半分とに、私はすっかり気圧けおされて、顔を外そ向けながら室の中を見廻した。

寺田さんの時とは全く違ってしまっていた。薄暗くがらんとして而もちゃんと整ってたのが、今は乱雑に散らかってぱつと明るかった。柱にかかっている着物や、座布団や炬燵布団や、鏡台のまわりの化粧壇や、机の上に盛り上っている雑誌や小箱や人形など、どれもこれも手当り次第に放り出されて派手な明るい色に浮出していた。そして室の隅には、油の肖像画が一枚不似合に置いてあった。

やがてお清は化粧刷毛を投げ出して向き直った。

「そんなところに坐って、何してるの。」

私はむつつりして顔を外らしていた。

「あ、あの絵、あれはあたしを書いたのよ。展覧会にも通った立派な画家のよ。似てるでしょう。」

然しちつとも似てないように私には思えた。

それから彼女は私にいろんな物を見せた。写真だの絵葉書だの函はこ迫せこだの人形だの……。小さな人形が沢山あるのに私は驚いた。

そんなことをしてるうちに、遠くで私の名を呼んでる母の声があったので、私は急いで帰っていった。凡てが何だか夢のようだった。

母は控え目な小言を云った。

「やたらに遊びにいつちやいけないよ。行くなら断っておいで。」

然し私は平氣だった。平氣よりも寧ろ心が浮々していた。お清の側にいる時は氣がつかなかったが、姉の道具にも嗅いだことのない甘い涼しい香が、いつまでも鼻に残っていた。

そして私はお清に親しんでいった。

その上私には他の目論見もあつた。知らず識らずいつのまにか考えついたことだった。

私達兄弟はちりぢりになっていた。一番上の兄の啓太郎は死んでいた。二番目の兄の啓次は山本屋に住み込んでいた。一番上の姉のお花は洲崎の女郎になっていた。二番目の姉のお新はカフェーに通っていた。三番目の姉は早く死んだ。家に始終一緒にいるのは私と妹のお三代だけだった。ところが、お花も啓次も殆んど

家に寄りつかなかった。だけならまだいいけれど洲崎はともかくとして、山本屋へもカフェーへも私は行くことが出来なかった。父母でさえ逢いに行けなかったので、私は猶更嚴重に禁ぜられていた。

そのことが私には全く腑に落ちなかった。子供心にも不正とさえ思われた。親兄弟が逢いに行くのを禁ずるなどと、そんな道理があるわけはなかった。——今でも私は、啓次やお新にこの点で怨みを含んでいる。世の中に対して怨みを含んでいる。

そこで私は子供心の反抗心から、不意にお新のカフェーへ押しかけてやろうと思ったのである。山本屋へ行つたつてつまらないが、カフェーは華かな別世界のような気がした。それも一二度連

れてつて貰ったことのある、硝子に紙のはつてあるバーや外部から見通しの呉服屋の食堂と違つて、お新の出てる神田のバーは、二階がレストーランになつてゐるごくハイカラな大きなものだった。私は一度、その前をひそかにうろついて、どうしても中にはいれなかつたことがあつた。

お清がそこへ出てゐることは何よりの幸だった。私は彼女に連れていつて貰おうときめた。

で或る時私はお清へそのことを頼んでみた。

お清は不思議そうに私の顔を見た。

「姉さんも行つてゐるじゃないの。どうして姉さんに連れてつて貰わないの。」

私は説明するのに顔が真赤になった。詳しくはなかなか云えなかったし簡単には猶更云えなかった。もし相手が寺田さんだったら、胸の鬱憤や疑問をそっくりさらけ出したかも知れないが、お清へは何だかそれが出来なかった。で苛ら苛らしながら、いくら頼んでも姉は連れて行ってくれないとだけ答えた。

「そう。でも……。」

彼女はまだ不思議そうに私の顔を見守っていた。私は無理に頼んだ。

「後で叱られやしないの。」

「大丈夫だい。叱られたって平気だよ。僕は意趣返をしてやるんだ。」

「なにを生意気云ってるの。」

だがその時、彼女は眼をちらつと光らした。とそれがすぐにくるくると動いた。

「いいわ。連れてってあげよう。……だけど……。」と彼女は暫く考え込んだ。「こうするといいわ。あたしが連れて行くと怨まれるかも知れないから、時間をきめていらつしやい。ね、いいでしょう。一人で来られるでしょう。その時間にあたしが待つてあげるわ。」

一度決心すると、彼女はなぜかひどく面白がっていた。そして、翌々日が階下の番だから、その七時に待つてると云い出した。

「昼間はいないかも知れないから、晩の方がいいわよ。でも家か

ら出られて……。そう、じゃあ屹度よ。間違えると承知しないわよ。あの……。神保町の四つ角に交番があるでしょう。知ってて……。そう。あの交番の時計がきっかり七時になったら、一二二二つて歩いてくるのよ。あたしあの時計に自分のを合して、入口で待つてあげるわ。」

私はその通りにすると誓った。

「ああそれから、あんたお金があつて。」

「ないよ。」と私は小声で答えた。

「じゃあ、これを持っていらつしやい。あすこじや都合が悪いから。」

彼女は小さな臺口から五十銭銀貨を二つ出してくれた。私は驚

いた。一円そこいらではとても行けないと思っていたのである。

「これでいいの。」

「ええ。」

「これくらいなら持つてるよ。」

「じゃあそれも一緒に持つてくるといいわ。……よくつて。交番の時計がきっかり七時になったら、一二一二つて歩き出すのよ。」

私はお清と約束した通り決行した。全くそれは決行と云つてもいい程度のものであった。平素の憤懣を晴らすというような、また空漠とした愛慾に惹かされるというような、また何かしら未知の世界に憧れるというような、いろんな気持が一種の熱となって、

私は夢中に燃え上つていたのである。

二日の間に私はあるだけの智慧をしぼって考えた上で、父母の前はどうにかごまかすことが出来た。そして他^{よそ}処^{ゆき}行の着物を——それも久留米緋のものだったが——着込んで、古いマントにくるまって、早くから家を出かけた。神保町の四つ角で電車を降りると、交番の時計はまだ七時に三十分余りも前だった。その間古本屋を覗きながら、何度も時計を見に戻つて来た。巡査の顔付や眼付は眼中になかった。愈々七時になると、一二一二という足取りで出かけた。そしてカフエーの扉の少し手前でぴったり立止った。擦硝子の電球を見るような硝子扉だった。電車や自動車や自転車や人間が、素晴らしく沢山通っていた。真暗な空と冷い風との中

で、何もかもが、明るい街路までが、幻影のように浮出して見え
た。

お清が出て来てくれなかったら、私はいつまでもつつ立って
たかも知れない。ふと気がつくと、カフェーの扉から半身を出
て彼女が、混血児そっくりの顔付で手招きしていた。それを見た
瞬間、今迄の熱情はすっかり消え失せてしまつて、私は石のよう
に冷くなつた。そして真直に歩み寄つていった。

「何をぼんやり立つてたの。」

私は返辞をしなかつた。彼女の後について中にはいった。ぱつ
と光の中に飛び込んだような氣持だつた。彼女に連れられて隅っ
この卓子に坐るまで殆んど無意識だつた。

円い腰掛、真白な冷い卓子、黒ずんだ植木、それらを意識しないで我に返ると、私は喫驚してしまった。胸をどきつかせながら空想していたようなものは何もなかった。学校の講堂より狭い天井の低いただ広い室、所々に置かれてる生気のない植木、卓子の列、鉄の煖炉と錆びた煙突……あちらこちらに二三人ずつの男が声低く話してるきりだった。

お清は私の前につつ立つてにこにこしていた。

「どう。……でもよく来られたわね。」

その彼女までが、白いエプロンをつけてるせいか、ずっと年取ってるように見えた。あの素晴らしい笑い方もしなければ、飛び上るような物の云い方もしなかった。

ただ、天井の大きな電球の光だけが素敵だった。

私はがっかりした。次には泣きたくなつた。がそれをじつと我慢してやった。

「何を食べるの……珈琲……お菓子……ホット・クラレット……」

私はただうむうむと気のない返辞をした。

私はもう何にも考えもせず感じもせずただぼんやりしていた。

一人になつても、お清がやって来ても、同じことだった。そして、甘い洋菓子と苦い珈琲とに手を出した。

「案外つままないな。」

「何が案外なの。」

そして彼女が初めて心からにっこり笑ってくれたので、私はいくらか落付いた。

然しその晩私は全く気がぼーっとしていたらしい。細かな出来事は少しも覚えていないし、大体の事柄だつて霧を通して眺めるようにぼやけている。はつきりしてるのはただ、私が次第に人の注意的となつていったことだけである。

カフェーの中は客が殖えていった。お清は大抵の者と知り合いらしかった。通りがかりに何かと冗談を云い合っていた。

「何だい、あの子供は。」

そういう声が私にも聞えた。

「あたしの弟よ。」とお清は答えていた。

「うまく云つてらあ。君の子供だろう。混血児あいのこは……早いって云うからな。」

その連中はどつと笑つた。

「いいわよ。」

お清は怒つた風をしながらも、笑顔をして私の方へよくやつて来てくれた。が話は別になかつた。

黙つてじろじろ私の方を見てる客もあつた。

向うの植木の影からわざわざ顔をつき出して、私の方を覗いた女給があつた。

二階に通ずる階段から、足音も立てないでひよっこりお新が降りてきた。私は思わず首を縮めた。

間もなくお新はまた出て来て通りかかった。と、不意に立止つて私の方を見つめた。お清が立つて、何やら耳元に囁いた。お新は蒼白い微笑をした。そしてつかつかと私の方へやって来た。

「早くお帰りよ。」

それだけ小声で云つて、睥みつけもしないで、澄した顔で二階に上つていった。

いつものお新とはまるで違つた感じを私は受けた。姉でも何でもない他人のような気がした。私の方でも意趣晴しなどということをすっかり忘れていた。

その後お新はも一度二階から降りて来た。然し行きも戻りも、私の方へちらちらと眼をやつたきりで、何とも思っていない様子

だった。私の方では、姉の立派な姿に感心させました。

珈琲もお菓子も無くなると、お清は大きなコップに麦稈のついでるやつを持って来てくれた。口の中ですーっと消えて無くなるような飲物だった。

私は皆から観察されながら、こちらでも皆の方を観察してやった。女給は大抵お清より年下の者が多いようだった。どれもみな同じような顔に見えた。ただお清の混血児顔が一人違っていた。客は会社員や学生だった。みな髪の毛を長くして顔の艶がよかった。誰も彼も愉快そうでそして威張りたがってるように見えた。が不思議なことには、一人もどっしり腰を落付けてる者がなく、いつでもひよいと立上れるようにしている、とそういう感じがし

た。それがひどく私には不安だった。それでも一つ不安なのは、皆が赤の他人で而も互に識り合いだという変な矛盾した感じだった。

痩せたハイカラな男とお清が暫く話をして私の方へやって来た時、私は尋ねた。

「もう帰ってもいい。」

「ええ、いいわ。こんどまたいらっしやい。」

そして彼女は私の方へ屈みこんで、一円だけ置いてゆくように云つて、つと身を退いた。私は立上つて、わざと様子ぶつて五十錢玉を二つ卓子の上に置いた。そしてぷいと飛び出してやった。

ぞーっと寒けがした。街路が薄暗く思えた。私はぶつぶつと唾

を吐いた。形態えたいの知れない反抗心が湧き起つてきた。前に考えたことがみなひっくり返つてしまい、皆から馬鹿にされ、恥しい目に逢つた、とそんな気がした。

寒い北風を真正面に受けながら、戸崎町の自分の家まで歩いて歸つた。

母から何やかや問いかけられても、碌に返辞もしないで、布団を被つて寝てしまった。

父は酒に酔つ払つて炬燵で居眠りをしていた。お三代がその傍で千代紙を折っていた。

私はひどく疲れていた。背骨まで、ぐにやぐにやになつてるよ
うな気がした。熱に浮かされたような心地で、眠つていった。

ところが、それからが大変だった。

私は夜中にいきなり母から引きずり起された。

母は歯をくいしばってぎりぎりやっていた。父は薄暗い眼をしていた。お新が私を睨みつけていた。

「お前は今日、何をしたんだい。」母は逆せ上って舌が廻りかねてるようだった。「餓鬼のくせに、わたしに嘘を云って、カフェーなんか遊びに行つて……何だと思つてそんなことをしたんだい。」

「そして一円払つていったんだよ。」と姉がつけ加えた。

「そのお^{あし}銭を、どこから持つていったんだい。……さあ云つてごらん。云えないか。云えないだろう。この野郎……。」

返辞をする間もなく、私はそこに叩きつけられてしまった。力任せに二つ三つ殴られた。

殴つてしまうと、母は少し気が静まったようだったようだった。「さあ、どうしてあんなところへ行つたか、云つてごらん。お錢もどこから持つていったか、白状しておしまい。すっかり云つてしまわないと、承知しないよ。」

だが、私はしつっこく黙っていた。

母はくどくどと責め立て初めた。愚痴っぽくなったり、怒り出したりした。何のために学校へ行つてるのか、とも云つた。先生に云いつけてやる、とも云つた。カフエーなんか子供の行くところじゃない、とも云つた。誰にそそのかされて行つたのか、とも

云った。金はどこから持ち出したのか、盗んだのか、とも云った。嘘をついて瞞かしたんだから、初めから何か目論見があつたに違いない、とも云った。隠し立てをして云わないようなら、外に逐い出してしまふ、交番につき出してしまふ、とも云った。皆がどんなに苦勞してるか分つてるか、とも云った。そして、父が長年造兵に出て苦勞したのも、兄がよそに奉公してるのも、上の姉が辛い勤めをしてるのも、次の姉がカフェーなんかに出てるのも、母が眼の悪いのもいとわず竹楊子の内職をしてるのも、みんな私のためだそうだった。——が私は茲に母の揚足をとるつもりではない。後で分つたことだが、母が日歩の金なんかを内々廻すようになったのも、私が少し学校が出来るものだから、私だけには立

派に学問をさせたいという腹もあつたらしい。

私は寝間着一枚で震えていた。母に殴られた頭や頸筋が痛むのを心で見つめていた。そして、カフエーへはただ行きかかったから行つてみた、金は自分で持っていた、とそう簡単に答えたきり、何を云われようと黙りこくつていた。

姉も母に代つていろんなことを云つた。それからまた母が怒り出した。私をも一度殴りつけられた。

そしてるうちに、皆黙りこんでしまった。しいーんとなった。私は云うものか云うものかと思つていたが、気が弛んできた拍子に、お清のことが頭に映つてきた。

私はふと吃驚して顔を挙げてみた。母も姉も一度だつてお清の

名を口にしなかった。当然そこに持出される筈のお清のことが、皆から忘れられていた。

私は前後の考えもなく、勝ち誇ったように云ってやった。

「お清ちゃんに行つてもいいかと云つたら、いいつて云うから行つたんだよ。」

母と姉とは眼を見合せた。それから母は私を見据えて云つた。

「お錢もお清ちゃんから貰つたのかい。」

「うむ。」と私は答えた。

「嘘じゃないだろうね。」

「嘘じゃないよ。」

母は何だか少し安心したもののようだった。姉が得意そうに母

の顔を見た。私には訳が分らなかつた。

けれども、その時私は、そんなことは一度に消し飛んでしまうほど驚いた。父がじいっと私を睨みつけていた。髯の伸びかかった兇悪な方の顔付で、眼を底光らせて、探るようにつめていた。私は胸の底まで冷りとした。

その眼付が後まで胸に残っていた。殺されるかも知れないという気がした。私は父が恐ろしくなった。

私は父を恐れたために父を観察するようになった。するとやがて、父の心の秘密な動きが分つてきた。

父は時々山本屋から古釘を持ってきては、それを鉄板と金槌と

で真直になおしていた。その音を母が煩さがるので、よく裏口でやっていた。

そういう時の父や、また酒を飲んでる時の父は、職に離れた如く何にも気の毒な老職工だった。また炬燵にしがみついてぼんやりしてる時の父は、世間に対する不平と諦めとの中にある廃残者だった。けれども、そういう父の中から、時々、電気にでも触れるような不気味なものが覗き出した。炬燵によりかかりながら、じつと空を見つめて、一心に幻を追ってるような眼付になることがあった。それが、お清に出逢うと更にひどかった。お清の身体のごとくといわず眼の落ちたところを、しつこく見つめていた。その視線がじつくりと、お清の身体に絡みついてゆくようなのに、

私はぞっとした。

お清自身は平気らしかった。少くとも平気らしく振舞っていた。一寸挨拶をしておいて、澄ました顔でつつ立っていた。以前の通りよくやって来た。お三代に物を持ってきてくれたり、朝は大抵お新を誘いに来た。私に対しても元通りだった。

「あんた、すっかり云っちゃったのね。お金を返されて困ったわ
」

あれから最初に顔を合せた時に彼女はそう云った。

「またカフェーに遊びに来ないの。来ちゃいけないの。」

二度目にはそう云った。

「カフェーなんかつままないでしょう。じゃあ、あたしが隙な時、

あたしの室へいらつしやい。」

三度目にはそう云つた。

然し私は、彼女と話をするのが憚られた。どこからか父が恐い眼付で覗いてるような気がした。その上、カフェーへ行つてからは、彼女の魅力がひどく薄らいでしまった。

「何か怒つてるの。ああ、紙風船を買つて来ないから……。」

そう云つて彼女はやさしく笑つたこともあつた。

だが、彼女はいつまでも私に紙風船を買つてくれなかつた。私のことなんかは殆んど念頭に置いていなかつたらしい。次第に素気なくなつていった。

その代り彼女は、父の恐ろしい眼付の前に大胆になつていった。

私は或る日曜日の朝、彼女と父との様子を裏口に見た。父は古釘を叩き止めて、金槌の工合をでも見るような風に、その頭と柄杓とを両手でぎりぎりやっていた。が眼は、前方へ下目がちに錐のように鋭く注がれていた。そこに、一二尺のところにお清がしやがんでいた。そして、冷たい感じのする頬辺をして、釘箱の中をかき廻しながら、この釘は本当に真直だとか、これはまだ少し曲つてるとか云っていた。父も口の中で何とか答えをしていた。その二人の言葉は、心がまるで別なところにあるような調子に見えた。そのうちにお新が出ていった。お清は立上つて、高慢ちきにつんと空を仰いだ。それが彼女の混血児顔にふさわしかった。さも何かを——父を——軽蔑しきつてゐるような様子だった。

私は流し場で筆を洗う風をしながら、障子戸の破け穴から隙見していたが、父が一寸振向いたのでぎくりとした。父のその眼付では、何でも素通しに見透されるような気がした。

そういう時の父と、平素のぼんやりしてる時の父とが、別々のものとなって頭に映るのが、殊に私は不安だった。大きな鉄の扉をでも見るようだった。平素一方を向いてるかと思うと、ぎいーっと音を立てながら他方へ向いてしまう。もう何の余裕もなかった。

父の酒の量は俄に増していった。朝から酔っ払ってることが多かった。縁の下の酒甕だけでは間に合わなかった。外から買われることが多くなった。勿論それ迄だって、人の注意を避けるため

だつたらうが、酒は外から買われていた。それが俄に殖えていった。母がいくら云つても父はきかなかつた。しまいには焼酎が買われるようになった。

焼酎を沢山飲んだことが、父の頭にはいけなかつたらしい。眼瞼がたるんで、眼付が据つてきた。

お新が感冒の心地でカフェーを休んでると、或る日お清は、午過ぎからどこかへ出かけて、晩遅くなつて戻つて来た。そして、殆んど毎朝寄つてくるせに、大きな果物籠を下げてわざわざ見舞に来了。いい御馳走を食べたか酒でも飲んだかして、ぽーっと上気していた。

父は焼酎に酔つ払つていた。がお清が来ると炬燵から起き上つ

て坐った。

お新は感冒と云つても大したことではなかった。

母はお清の見舞物に恐縮していた。そして皆で一時間ばかり話をした。ただ取留めもない世間話だった。お清は愉快そうに一人ではしゃいでいた。混血児顔を消してしまうあどけない笑いが、始終口元に浮んでいた。

父は酔つてただぼんやり坐つてるだけというように見えた。然しその眼は時々、いつぞや私が裏口で隙見した時と同じような鋭さになって、お清の顔や手足や胴体など、どこといわず落ちたところにも、ぴったりくつついていつて長く離れなかった。その方へまた私は、見まいとしてもじりじり気が惹きつけられていった。

父が眼をつぶって顔を外らすと、私はほっと息がつけた。がそれでもやはり、父の心全体がお清の方にねじ向いてるのが感じられた。

お清は勿論父の眼付を感じてゐるに違いなかった。上気してたような顔が次第に蒼白くなってゆき、あどけない笑いが消え、額のあたりが冷たそうになっていった。そしてしまいには反抗的な態度に出た。爪の色がどうだとか云ってしきりに指先を弄んだ。その手をだらりと炬燵の上に投げ出した。膝を崩してしどけない坐り方をした。わりに毛深くて困ると云って、実は毛の少いまるっこい二つの腕をまくってみせた。彼女の皮膚は非常に毛穴が小さく肉のぼってりした感じで、見ようによつてはいくらか不気味

だった。

それらのものを一々、父の執拗な眼付が吸い取っていった。

お清は時々かすかに身震いをして唇を噛んだ。今にも彼女が喚き出しはすまいかと思つて、私はびくびくしていた。

その時、話はだんだん内証事に落ちていって、母はお清がつけ廻されてる男の事を持ち出した。その男を刑事と間違えて酒のことで心配したなどと云つた。

「どうしてあんなに執念深いんでしょう、嫌になつちまうわ。」とお清はぼんやり云つていた。「だけど、あの男ばかりじゃないわ。あたし毎晩泥棒につけられてるような気がするのよ。夜中に家のまわりによく足音がして、おちおち眠られもしないことがあ

つてよ。」

「それもやはりあの人じゃないかしら。」とお新が云った。

「そんなことないでしょう。……あたし何だか気味が悪いから、近いうちに引越そうかと思ってるの。」

それから話は家賃や室代のことになった。

その、お清が殆んどでたらめに云ったことが、強く父の注意を惹いたらしかった。父はぎくりと頭をもたげて、正面にお清を見つめ初めた。皆がその場に居合してゐることを忘れたかのようだった。お清は少し身を引いてもじもじしだした。混血児風の顔が石の彫刻のように見えた。そして、話半ばに突然帰つていった。

母と姉とは、彼女から貰った立派な果物を持出して、いろいろ

品評し感心し合つた。

お清に対する父の凝視には誰も気付かないらしかつた。五十を越した失職職工がお清に夢中になろうとは、思いも寄らぬことだつたに違いない。

然し私は父を責めたくはない。当時私はただ恐怖と不安とだけしか感じなかつたが、今になっていろいろ考えてみると、父に同情したくなつてくる。長年やり続けてきた労働を突然奪い取られてしまい、古釘なんか叩いて僅かに生理的なごまかしをつけ、その上、もう世の中に用がないという気持から、酒にばかり浸つていたところへ、何かの機会から若い女の肉体に心惹かれてゆく……。そこにはどうにもならないものがあつたらしい。その上父は、

元気こそ衰えていたが身体はまだ丈夫だった。私は父の心の動き方の特殊な点を考えては、父にも仕事さえあつたら……とそう思わざるを得ない。寺田さんの云い草ではないが、人間には死ぬまで仕事を与えるがよいのだ。仕事を奪うことは残酷であり罪悪である。

それにしても、私は父の執拗な眼付をこまかく見て取つたことに、一種の羞恥を感じる。私がもしお清に対して全然性的無関心でいたら、ああまで深く父の眼付が私の心に刻みこまれはしなかつたらう。

私はただ胸をどきつかせてばかりいた。漠然とした不安と恐れとに押し被されて、出来るだけ身を隠しながら見てるより外に仕

方がなかった。

お三代はひどく低能だった。その代りひどくおとなしかった。そして皆から無視されがちだった。お新は夜十二時過ぎでなければ帰って来なかった。それを母は眼をしょぼしょぼさせて待つていた。母は気性はあくまでも確かだったが、眼は益々悪くなつていった。いつも目脂めやにをためてじめじめした眼付をしていた。夜は何も出来なかつたけれど、昼間はせつせと内職の竹楊子を拵えていた。その惨めな仕事に時々、父のカンカンいう金槌の音が織りこまれた。が大抵は、父はもう酔っ払つてばかりいた。そして炬燵にねそべつていて、不意に飛び起きては眼をぎろぎろさしていた。

不幸なことは、お清につき纏つてる例の男が、益々執念深くなつてゆくようだった。夜遅く父がむつくり起きるのを私は見たことがあった。ただ、父は初めほど戸締りを嚴重にしなくなった。というよりも寧ろ、戸を開け放しておきたがつてるかのようにだった。私は一度も見たことのないその男に対して、さまざまの空想を逞うしながら、幽鬼にでも対するような恐怖を覚えた。

お清とお新だけが、凡てに無関心に伸び伸びと振舞っていた。大抵連れ立ってカフェーに出かけていった。が気のせいか、お清は次第に醜くなるようだった。

或る朝、顔を洗ったばかりの彼女を見て、私は吃驚した。混血児風の顔立が変に骨立って、唇に黒い皺が寄っていた。それが、

日の光のさしてゐる窓の真中にぽかっと浮出していた。

「何をそんなに見てるの。」

彼女はそう云つて弱々しい微笑を洩らした。私は飛んで行きたいのをじつと我慢した。

彼女が醜くなり陰気になるに従つて、私は反対にまた彼女に惹きつけられそうだった。初め彼女に惹きつけられたのと逆の気持ちだった。それを私はぼんやり自分でも感じて、どうしていいかわらなかつた。

そのうちに、不意に、全く不意に、最後の事件が持ち上つた。

風のない少し暖かな、三月初めの夜中だった。曇つていたのか晴れていたのか、ただ星が二つ三つだけ光つてたことを私は覚え

ている。

何か大きな音がしたようだった。それを夢現に聞き流してまたうとうとした頃、私はいきなり母から呼び起された。喫驚して起き上ると、母は何とも云わないで裏の方へ出ていった。姉も続いて出て行った。私は一寸待つてから、ふいに駆け出した。

裏の狭い空地の中、お清の室の窓の近くに、低い椿の木の横に、寝間着のまま母と姉とお清とが立っていた。お清は裸の蠟燭を手に持つていた。そのほんのりと赤い光の流れてる地面に、起き上ろうと躓いてるような恰好をしてつつ伏しに男が一人横たわっていた。

それが父だった。私が駆けつけた時には、お新がわつと父の上

に泣き伏していた。

一発を足先に、一発を脇腹に、父は二発のピストルの弾丸を受けて、血に染っていた。

父はもう意識を回復しなかった。医者が来た時は死んでいた。

事件は当時、「戸崎町の殺人」として新聞に詳しく報道された。犯人はすぐにつかまった。頭字入りのソフト帽が現場に残っていたのと、お清やお新や母の証言があった。そして犯人の陳述は有利だった。お清を殺すつもりでつけ廻していたが、あの晚ふいに後ろから飛びつかれたので、逃げるためにピストルを放って、一つは足を狙い一つは腕を狙ったのである……。それに反対の立

証は成されなかつた。それでも後に、彼は七年の刑に処せられた。私は当時新聞紙にのつてる彼の写真を見て驚いた。目鼻立の整つたやさしそうな青年で、人殺しをしそうな顔ではなかつた。

それから父は、盗賊を捕えようとして殺された勇敢な老人と報道された。砲兵工廠に長年勤続した模範職工とも書かれていた。お清と父との間柄は何一つあは発あかはれなかつた。それを知つてるのは、当事者以外では恐らく私一人だけだつたらう。

父の葬式は悲しかった。警察署や裁判所などとの交渉の間に挟つて、慌しく取行われた。お花も啓次も久しぶりで家にやって来た。私。

私は寺田さんが来てくれやしないかと思つて喜んだり心配した

りした。寺田さんに逢うのはその場合私の最も嬉しいことだった。然しもしやって来たら警官に捕つかまはすまいかと心配した。

寺田さんはやって来なかった。何の便りもなかった。

私は寺田さんから貰った大きな虫眼鏡をなつかしく取出した。始終持つて歩いて、いろんなものを眺めては一人心を慰めた。それをお花が不思議そうに見とがめた。

「それ、珍しいものねえ。」

「うむ。」と私は昂然として答えた。「これで太陽を見ると、汚しみ点が見えるんだ。」

太陽という言葉を口にするのが私は得意だった。

「ほんとうに見えるの。」

「見えやしないや。ぎらぎらして……。」

姉は笑った。そして、青か黒かの薄い色をレンズに塗れば眩しくない、と教えてくれた。

「日の照っている海を、虫眼鏡で見ると、そりやあ綺麗だわよ。」
なよなよした身体付をして、舌ったるい口を利いて、家に来て
も一日火鉢にばかりかじりついてるその姉を、私は何だか好きだ
った。母のような気持さえした。

その姉に教えられたことが私は嬉しかった。そして、どうにか
太陽の黒点らしいものを見ることが出来た。

然し、それから間もなく、私の悲惨な放浪生活が初つたのであ
る。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第二卷（小説2 [#「2」はローマ数字、1-13-22]）」未来社

1965（昭和40）年12月15日第1刷発行

初出：「新潮」

1926（大正15）年3月

入力：tatsuki

校正：門田裕志、小林繁雄

2008年10月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

黒点

——或る青年の「回想記」の一節——

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 豊島与志雄
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>